

平成 23 年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ黄化萎縮病（No. 1）

平成 23 年 6 月 3 日
鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

本年は梅雨入りが早く、これまでの連続降雨により、一部の水田では田植え後の浸冠水が確認されている。田植え後から 6 月末頃までに浸冠水すると、イネ黄化萎縮病の発生が懸念される。本病は多発生すると大きな被害につながることから、浸冠水地帯では早期発見に努め、多発生が予想される場合には、薬剤防除によって被害を未然に防ぐことが重要である。

2 黄化萎縮病とは

（1）病原菌、生態

- ・病原菌は糸状菌(カビ)の一種で、畦畔のイネ科雑草やムギ類に寄生し、最初の伝染源となる。
- ・本田あるいは苗代の浸冠水により、病原菌がイネに感染する。水温 15～20 程度の時に感染しやすい。イネへの感染期間は、田植え後から分けつ中期頃までである。

（2）病徴（写真参照）

- ・株全体が萎縮し、分けつが多くなる。葉はやや幅広となり、黄化して白いかすり状の斑点を生じる。穂数は少なく、出すくみ穂や奇形穂となり不稔になることが多い。生育初期の感染株は枯死する場合がある。

（3）被害

多発生すると減収が著しい。

（4）鳥取県における過去の発生状況

昭和 40 年前後に数百 ha、平成 9 年に 265 ha で発生が認められている。平成 9 年の一部の多発生水田では、白葉枯病の混発もあり著しい減収（100kg/10a、屑米多く出荷不能）となった。

（5）その他

いもち病とごま葉枯病を併発しやすい。

3 防除対策

浸冠水後から発病初期までに、リドミル粒剤 2 を湛水散布する（6 kg/10a、1 回、収穫 90 日前まで）。

【イネ黄化萎縮病】



(株の萎縮症状)



(葉のかすり状斑点)



(葉の白いかすり状斑点の連生)